

# Refugees ドイツにおける 難民受け入れ問題と 市民意識

ドイツ連邦軍大学 ミュンヘン校  
的場主真教授

Kazuma MATOBA



2017

3 / 1 水

15:00 → 17:00 | 入場無料

場所 首都大学東京  
南大沢キャンパス  
国際交流会館 大会議室

## 申込み

- 入場はどなたでも自由です。
- 準備のため、参加の旨を前日までにメールでお知らせください。

連絡先: 首都大学東京・国際センター 教授

助川泰彦 (講演会世話人) [sukegawa@tmu.ac.jp](mailto:sukegawa@tmu.ac.jp)

地 図: <http://www.ic.tmu.ac.jp/siteinfo/access.html>

交 通: 京王相模原線南大沢駅から徒歩 13 分

## 講演要旨

ドイツでは2015年をピークに、シリア、アフガニスタン、イラク、アフリカ諸国から多くの難民を受け入れており、その数は180万人以上に達している(国連難民高等弁務官事務所2016年6月発表)。

連邦政府と州政府は一体となり受け入れ態勢を整備し、多くの成果を挙げているが、その一方、2016年1月にケルン市で起きた北アフリカ出身の難民男性による集団暴行事件や同年12月のベルリンにおけるテロ事件の影響で、極右、右派による難民受け入れ拒否、排斥運動も過激化し、ドイツ世論は難民問題を巡って完全に二分裂している。

その中で注目すべき事実は、多くの心ある市民がボランティアで難民受け入れ活動に参加していることである。この市民たちの活動動機はさまざまであるが、ナチスにより多くの難民を国外、海外に排出した暗い過去の償い意識から、活動に参加している人々も少なくはない。

本講演では、ドイツ連邦軍大学の学生達と難民との間で行われた対話セミナーを紹介する。セミナーではドイツ人学生が対話を分析し、受け入れ側のドイツ人にどのような能力(異文化能力、社会能力)が必要であるかを検討した。

## 講師紹介: 的場主真 (まとは・かずま)

専門分野: コミュニケーション学、異文化教育、平和教育

近年の研究テーマ: コミュニケーションと意識の進化、統合医療におけるコミュニケーション活動の重要性、紛争地域における対話教育の重要性  
研究に隣接した活動: イスラエル・パレスチナにおける異文化トレーニング(ナブルス大学)、EU内での民主主義意識啓蒙のための英語教育(エラスムスプラス)

略歴 ●1990: 上智大学大学院外国語学専攻修士課程修了 ●1990~1992: 東海大学留学生教育センター助手、慶應大学総合政策学部非常勤講師  
●1992~1994: ドイツ政府国費奨学生、デュースブルク大学 ●1996: 同大学にて博士号取得(社会言語学) ●1996~2009: ヴィッテン・ヘルデック大学経済学部比較文化経済研究所研究員 ●2010: 同大学にて教授資格取得(コミュニケーション学) ●2010~2014: 同大学文化学部准教授  
●2014~現在: ドイツ連邦軍大学ミュンヘン校人間科学学部教授